

2024年9月15日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教10 「何が心の中にあるのか」

エレミヤ17：9～12、ヨハネ2：23～25

ここは大変厳しい内容となっています。多くの人々がイエスさまを信じたとあるけれども、イエスさまは人々を信用されない。どうしてか。それはわたしたちの心の内をご存知だからです。表向きはどんなに信仰深く装っても、取り繕っても、わたしたちが不完全であることをイエスさまはご存知であられる。だからイエスさまから信用されない。何か突き放されたような、冷たい印象を受ける人もいらっしゃるかもしれません。

しかしよくよく考えれば分かるでしょう。本来わたしたちが救われることはあり得ないのです。それほどにわたしたちは神さまを裏切り、その愛を裏切ってきました。だから神さまから信用されないことは当然です。まずはそこに立たないといけない。神さまとわたしたちの間には大きな隔りがあるのです。前々回ですが、カナの婚礼の話でも、イエスさまが母マリアに「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです」(2：4)とおっしゃった。この言葉を意外に感じられた方々が多いと思います。突き放されたような印象。でも欠けのあるわたしたち人間と、まことの神さまとは本来かわりがなくて当然なのです。むしろ相容れない存在であるということ。わたしたちはそのことを忘れてしています。だからこそ福音書はそういうわたしたちの本当の姿を思い起こさせるために、このような厳しい言葉を挟むのではないのでしょうか。

では、改めてイエスさまは、ここでわたしたちのどのような信仰の姿勢を問題にされているのでしょうか。「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人々がイエスの名を信じた」(23節)しるしを見て信じる。「しるし」とは、奇跡のことです。カナの婚礼のところでも「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された」(2：11)とあります。水がぶどう酒に変わる、そういう奇跡が行われた。ちなみにこの「しるし」は複数形ですから、おそらくエルサレムでも数々の奇跡が行われたのでしょう。そのしるしを見て、それに引き寄せられるようにしてイエスさまを信じる人々が現れる。

そうなるというの間にか、しるしがあることが、信じる条件のようになっていく。しるしがあるから信じる。なければ信じない。これはマルコ福音書ですが、イエスさまが十字架におかかりになられた時に、人々がイエスさまを罵って「今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」(15：32)と言ったことを思い出します。またヨハネでも最後に疑い深いトマスの話がある。イエスさまはトマスに「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20：29)とおっしゃった。見たから信じる。しるしがあるから信じる。信仰が交換条件のようなものになっているのです。

前回、宮きよめのところでも触れましたが、信仰が商売と結びつく。そういう中で、わたしたちはいつの間にか神さまと取引きをするようになる。こうしたら救ってくれると計算するようになる。結局、それは自分にとっての利益を考えている。この神さまを信じたら得するのか、損するのか。しるしを見て信じるというのは、神さまを信じるのが損得勘定のようになっていくということではないのでしょうか。わたしたちの人間関係に当てはめても、もしそのような損得勘定で誰かと仲良くするしないということであれば、それは相手に対して大変失礼な話です。それこそ商売の相手のように見ているということです。もし相手がそういう目で見ているとい

うことが分かったなら、その関係はもはや終わりでしょう。結婚も自分にとって条件がいいから結婚する、損得で決めるということであれば、そこに本当に愛があるのか疑わしくなってしまう。でもわたしたちは神さまに対してそうではないと果たして言い切れるでしょうか。イエスさまはわたしたちの本心を見抜いておられる。それが「彼らを信用されなかった」という厳しい言葉で示されているのです。

先日、新聞に現在東京女子大学の学長である森本あんりさんが、特にアメリカの福音派の問題について触れていました。「信仰のマッチョ化」「筋肉質のキリスト教」という言葉がありました。特にアメリカの福音派の特徴として、富や成功という力強さ、男らしさが信仰と結びついていく。開拓時代のたくましさ、力強さを「マッチョ」と呼ぶのでしょうけれども、強い人、成功している人は神さまから祝福されていると単純化していくのです。それはある意味、富や成功というしるしを見て信じるということでしょう。それは逆に成功しなければ信じない。豊かにならなければ信じないということです。良いことがあれば信じる、悪いことがあったら信仰を捨てる。けれども信仰は単純に割り切れるものでしょうか。ヨブは言いました。「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」(2:10) この信仰とは程遠い世界です。でもわたしたちの信仰はすぐにもそのようなしるしに左右されるものになってしまうのです。そういう誘惑が大きいし、わたしたちはその誘惑にとっても弱いのです。

けれどもイエスさまは、そのようなわたしたちの心の中をすべてご存知の上で、忍耐を持って、わたしたちとかかわってください。わたしたちは損得で信じたり信じなかったり、神さまに対して失礼な者ですが、神さまは損得抜きにかかわってください。その証拠にイエスさまをくださった。十字架ですべてを献げて、その愛を示されたのです。この愛に立つてこそ、わたしたちもそれに甘んじるのではない。わたしたちも無条件で、損得抜きに神さまを信じる、神さまを愛する歩みがそこに作られていくのではないのでしょうか。

エレミヤが「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」(エレミヤ17:9) というように、人の心は病んでいます。それはこの預言者の時代だけではない。はじめの人間から今日までずっとそうなのです。福音書は、決してそのような人間を過大評価しませんし、優しい言葉で慰めません。ただ信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得る道、イエスさまを示します。信用に足る者ではないわたしたちでも救われる道を神さまは与えてくださいました。その恵みに対して感謝する以外にありません。

天の父よ。あなたの愛を裏切り、全く信用に足る者ではありません。けれどもあなたの愛がそれに優っていることが何よりの救いです。そのために独り子を惜しまずくださいました。どうぞその愛に気づかせてください。そしてこの愛に応える者とならせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。